

1970年

幼児教育を想う

——とくに幼稚園の問題点——

はじめに

今年から五年前には国をあげて幼稚園創立九十周年を祝い、昔からこの道にたずさわっている者たちは、ようやく一人前の扱いをうけるようになった幼稚園教育に、手をとり合ってよろこび、

次にくる一〇〇年目には……と、大きな期待をもって、「正しい幼児教育の場となる幼稚園の発展」を夢みたのに……、数の上ではたしかに喜ぶべき増加率ではあるけれどその目的、方法、内容（保育形態なども含めて）ともに寒気するような方向が、いの幼稚園が誕生しつつあるのに刺げきされてか？ だんだんと幼稚園らしくない「小さい子どもの集団場所」ができてくることに悲しい思いをしているのは私ばかりではないと思う。

一昨年の暮頃からは婦人雑誌にそのまちがった幼稚園の話題を提供したり、昨年二月頃から週刊誌にはたびたび幼稚園経営についてのにやな話題をのせられたり、また、時には学者先生によつ

て「二歳ではおそすぎる」などの見出しで低年齢幼児の知能テストの必要性など耳あたらしい記事におとなたちをまよわせたり、おどろかされることがあった。とくに最近ではNHKはじめ他局でもテレビで三年保育児の問題を取りあげたり、番組「生活の知恵」や「一〇二」では三回にもわたって「園児の漢字教育」をとりあげている。母親たちは常におろおろさせられて不安定な気持ちになり、それらが幼稚園の中にも持ちこまれて表面的な知的生活を要求される。あちこちで若い先生方をなやませていることは事実だ。

一方ではこれまた、有名な先生方の中に「もうそろそろ幼稚園教育の内容が変わってくるはず」などといわれれば、理論だけ学んできた純粋な新卒先生には、幼稚園教育の姿を表面的にいう「見せよう」と苦心するのはあたりまえのことと思う。

目あたらしい記事や耳あたらしいことばに刺げきされやすい母

親や純すいな幼稚園の先生方によって今後幼稚園教育の内容がほとんどままちがった方向におし流されてゆくのではないかと心配していた時、幸いと編集部から「幼稚園の問題点をかくように」といわれた。十枚の紙面には表わしようもなく、また解決には道遠い問題が多く、複雑な感情をどう表現で得るかわからないが、とに角ベンの走るにまかせて記してみよう。

○現代っ子とは？

世の中のおとなや、幼稚園の先生方が「現代っ子」と称する子どもはどんな姿をした子どもだろう？ 昔の子どもとちがったところのないところをもっているのか、またわるいところだらけな子どもなのか？ どんな姿をとらえていっていることばだろう。あちこちに増してきた「幼児研究所」は、みんなことばはちがっても、子どもの話をきいてみれば、知能テストの練習所か、研究所、そうしたところでせめてははっきりしたものを発表してくれればと思うがそれもない。個人差の多い年齢、内面生活のとらえにくい時期、はっきりしたものがでてくるはずがない。

最近是有名小学校に進学する準備ばかりでなく「幼稚園では遊んでばかりいるから」と両親が小学校入学後のことを案じて通わせているようにきいたことがある。みんな両親の不安感がさせることで、とかく表面的に表われる現象だけをとらえて勝手な見方をしては喜んだり、なげいたり、その度に「現代っ子」というこ

とばがでてくるようにも思う。

たしかに身長体重は十年前から見れば非常にすぐれているようにいろいろな統計などでは記されているが、個人差をもつ一人一人の子どもの内面生活は、家庭環境、その他いろいろと条件の違いなかでは比較のしようもない。たしかに昔の子どもよりは表現活動が活ばつになり、ことに、ことばの面では表現能力の上位な者が多いと思うが……。五十年近く幼稚園生活をしてきた私の目には大した変化があるようにも思われない。たしかに身体的成長はすばらしい。入園前に大病をしたという子どももほとんどいないようなこの頃である。しかし、表現生活は自由である反面、相手の気持も考えずに「いやだ」とことばも強く拒絶することや衝動的な行動の多いことにも目を見はる。一つの遊びに夢中になる姿も昔とはずいぶんうすが変わって、早くあきてしまったり、「やる気があるのかないのか」つかみにくい子どもも目立つがこれは時代の影響で仕方ないと思う。子どもをとりまく家庭の生活環境が全く昔とはちがいで、とくに子どもの目につくおもちゃ類のちがいに非常に左右されていると思う。こうした中で幼稚園側の教育方針なのか？ 保育計画が子どもたちの自発活動を満足させ得るような「遊びの場と時間が不十分」ということは、子どもの姿にいろいろな変化をつけてしまうことになる。

○母親がわが子にかける期待

今も昔も変わらないのは、盲愛、過保護、期待のかけすぎで、幼稚園入園前に、すでにいろいろの問題を子どもたちにもたせていることは事実である。それがまた、社会の変化に伴って生じたか？ 家庭内の不安定な生活や、両親の不本意ながらの、望ましくない家庭環境など（住宅、職業、その他）昔は考えられなかったような、自分たちの生活を守るための社会環境の中では、自然と大きな期待をわが子にかけていて、複雑な感情が子どもたちの気持の中にもとけこんでいたり、やむを得ず望ましくない生活の相手をしていることに気づかぬ母親たちの多いことにおどろくこの頃である。

そうしたなかで子どもが要求するおもちゃ類は昔は考えられなかったような立派なものばかりで、女兒の手にする人形は抱いて遊び、家庭生活で感じとる愛情をそのまま模倣するようなものではなく、小さなきせかえ人形ですばらしい洋服セット、家具類など……、男児は精巧なミニカーや怪獣ロケットなど、みんな要求通り買ってもらっている。その遊びの内容は子どもらしさを表わすこともなく、一つの遊びに長時間打ちこむ姿はあまり見られなように思う。こんなことにも思いをよせて幼稚園教育の内容には大いにくふうや努力が必要なのに……。幼稚園経営の上からはいろいろと苦心のある園長の苦労も察したり、また、理論で学んだ新卒先生の純すいななやみも解決してやらねばならぬ毎日で、

あちらこちらに厚い厚い壁のあることを感ずるこの頃ではある。

○幼稚園の現状から

文部省の打ち出した幼稚園教育振興七カ年計画が実を結び、東京都などは毎年二〇〇二五園の新設公立幼稚園が誕生し、私立幼稚園との関係はますますむずかしくなってきた。

昨秋も新宿区のある幼稚園長は、NHKテレビの画面にはつきりと自分の姿を写し出し、「私の園の近くには公立幼稚園ばかりで、それに対抗するために新しい試みをしなければならぬので漢字教育を始めたので保護者も大変よろこんでいる」と言われ私はほんとうに驚いた。私幼こそ私幼ならでは、できない豊かな幅広い教育内容で、子どもたちをのびのびと明るく育てることを「わが園の教育方針」にすることはできないのだろうか？ それぞれのもつ可能性は知的なことだけでないはず、もっと豊かな感情や表現力創造力を身につけさせることにプライドが持てないのだろうか？ と残念に思えて仕方なかった。

こうしたまちがいは今後あちこちに多くなるのではないだろうか？ 園児が鼓笛隊を組織して街頭行進をして拍手かっさいをうけたとか、楽器あそびであるはずのものがすばらしい子どものバンドを組織してコンクールに出場し、おとなたちを楽しませるとか？ 表面的なことのみ苦心をせねばならない幼稚園教育の内容が案じられてならない。今こそ私幼の特徴というか、専門的な

勉強をされた園長の指導力によって幼稚園教育の正しい方向づけをしていただきたいものだ。若い先生方にもっと指導の手をさしおべてほしい。どこの幼稚園長も「多忙」のかげにかくれて「主任まかせ」「私は幼稚園のことはわからないからあなた方でいいように」と大変民主的でよいことのようにではあるが……、これが幼稚園教育をゆがめていく一つの原因であるとも感じられる。

幼稚園というところは、子どもの立場では楽しい生活で、精いっぱい遊びを楽しめる場であること、豊かな感情のふれ合うなかで気らくに「指導」がうけられるように、教師の立場としては常にその指導法の反省がされねばならない所で、この「指導」という言葉にいろいろな幼稚園教育の問題点がふくまれていいる現在、園長を中心にして、全職員が常に明るく真剣に「わが園の教育内容研究」がおし進めてゆかれるような態勢を整備することの責任を園長にもってほしいものだ。

おわりに

書いても書いても終らぬ問題、しかも解決にはほど遠い問題がまだいくつが残っている。せめて残った紙の上に私の希いをこめて簡条がきで問題だけを記してみよう。そして、一日も早く問題解決の道が開けてゆくように念じながらペンをおく。

1、教職員の待遇改善に困または市町村の力を

公立幼稚園と私立幼稚園、教職員の給与の幅の広すぎることを

一日も早く是正しなければならない。その上に産休、ボーナス、その他の諸手当によって生活の安定が得られれば幼稚園の運営に安定感を見出せる。しかしこれは現在私幼の中にも個人立と法人立、宗教団体のことなど別な方面のいろいろな問題は山積していると思う。

2、私立幼稚園長の資格認定を正しく

新設園設置までには並大抵の努力、苦心ではないと思うが、教育の土台をうけもつ幼稚園長には幼児教育の根本だけはわかつていもらねばそこで働く教職員は不安定である。

3、行政官、その他指導的立場の先生方にも幼児教育の再確認を市町村によっては未だに保育園と幼稚園を混同されたり、幼稚園は小学校教育の準備だけの機関であると思いきんでいいるように思う。これが新卒教員にいろいろなやみをもたせているようだ。

4、学者先生にご協力を

保護者の心を不安定にするような記事をかかないでいただきたい。もし「まちがった方向？」と思われるような記事をごらんの節は訂正していただきたい。四四年二月号「幼児と保育」誌には四人の先生方でそうした訂正の座談会をもたれた時の記事「心理学はまちがっている」がのせられ、近来になくうれしくよみ終わったことがある。

(44年10月18日 Y・K記す)